

原 著

投影樹木画法における実の教示を巡る
Buck 法と Koch 法の比較研究

大 辻 隆 夫* 塩 川 真 理** 田 中 野 枝***

A Comparative Study on the Instruction of Buck's Technique "Draw a Tree" and Koch's Technique "Draw a Fruit Tree" in the Projective Tree Drawing Technique.

SUMMARY

We currently have two kinds of instruction styles on the projective tree drawing techniques: Buck's technique "Draw a tree" and Koch's technique "Draw a fruit tree." We'll have some differences on interpretation techniques in constructing an emotional hypothesis with an artist as far as a fruit is a symbol of immaturity or dependency.

We considered the frequency of drawing fruit (drawing-provocativeness), developmental differences and sexual differences in this study.

The subjects, kindergarten children and high school students, were divided into two groups which consisted of both Buck's and Koch's techniques. They practiced projective tree drawing techniques by a group inquiry method.

As a result, we found that Koch's style of drawing fruit was more provocative than Buck's (kindergarten children: $x^2=46.47$, $p<.001$; high school students: $x^2=45.07$, $p<.001$). Therefore, it proved that Buck's style is proper and valid in practicing projective tree drawing techniques as a basic technique and not as a specific technical method.

問 題

投影樹木画法における教示法には、Buck (1948) らの「木を1本描いてください。: Draw a tree.」(Buck 法^(*))と、Koch (1949, 1952) の

「実のなる木を1本描いてください。: Draw a fruit tree. ; Zeichne einen Obstbaum.」(Koch 法)の、2つの流れがある。我が国では1970年の翻訳導入以来 Buck 法より Koch 法が流布しているが、Koch 法で投影樹木画法を実施する際、実の描画を巡って象徴解釈技法上根本的な問題が提起される。つまり、実が未成熟ないしは依存性の象徴(大辻, 2002, Cantlay, 1996, Jolles, 1971, Buck, 1966, Hammer, 1954)である限り、描画者に実を意識させる Koch 法と、それを意識させない Buck 法では、実の描画者に対する情動仮説の構築に、解釈技法上の違いが生じる。

投影樹木画法は、それを児童虐待早期発見の

* 京都女子大学家政学部助教授 (児童教育学)

Takao Otsuji

** 大阪府教育委員会子どもサポートグループSC

(臨床心理士)

京都女子大学大学院研修者 (平成14年度)

Mari Shiokawa

*** 京都市西京子ども支援センター (相談員)

京都女子大学大学院研修者 (平成14年度)

Noe Tanaka

ツールとして発展させているアメリカでは、Buck 法に基づき展開してきた経緯があるので、教示法それ自体についての問題は生じていない。しかし、我が国においては、またある意味それが我が国特有の問題であるとも言えるが、上に指摘したように実の教示を巡ってのこの種の問題が、すでに多くの先行研究において示唆されている（一谷, 1966, 中田, 1982, 津田, 1976）。例えば一谷ら（1966）は「実のなる木を描きなさい」の教示で実の描画がみられなければ、そのことがむしろ問題になると述べている。また中田（1982）は、我が国では Koch 法で教示をおこなうと被検者に実を描くことを誘導する傾向があり、誘導されて描いた実に解釈仮説を適用することはできないと指摘している。最近では Buck 法で実施する検査者が増加の傾向にあるが（中田, 1981）、Koch 法と Buck 法において実の描画にどのような差が見られるのかについてはこれまで実証的に検証されている訳ではない。本研究では、これらのいずれを支持する方が本検査法の正当な実施において適切であるかを検討するための基礎的研究として、実の描画に関する出現度（描画誘導性）、発達差及び性差を検討する。

対象と方法

1. 対象

① Buck 法グループ：幼稚園児 男児17名、

女児13名、および高校生 男子23名、女子68名。

② Koch 法グループ：幼稚園 男児18名、女児23名、および高校生男子28名、女子75名。

2. 方法

①対象となる265名を2つのグループに分けた。一方のグループには Buck 法による教示「木を1本描いてください。」に従って集団実施法により投影樹木画法を実施した。他方のグループは Koch 法による教示「実のなる木を1本描いてください。」に従って、同じく集団実施法により投影樹木画法を実施した。

②回収された樹木画をグループごとに「実」が描かれた樹木画を選び、両群でのその出現率を比較した。

結 果

1. 2 種類の教示法における実の出現度（描画誘導性）について

2 種類の教示法ごとの実の出現度数（人）および χ^2 検定の結果を表1に示す。Koch 法では Buck 法よりも、幼児 ($\chi^2=46.47$, $p<.001$) および高校生 ($\chi^2=45.07$, $p<.001$) のいずれの発達段階においても有意に高く実の描画が出現したことが確認された。幼稚園児を見ても、Koch 法では実を描かなかった園児は皆無で、実の出現率は100%であった。Buck 法では実の出現率は2割程度であった。高校生においても、実の描画は Koch 法で有意に多く出現し

表1 投影樹木画法における教示法別の実の出現度（人）

	Buck 法		Koch 法		χ^2
	実あり	実なし	実あり	実なし	
幼稚園児	(n=30)		(n=41)		
男	4	13	18	0	21.90**
女	3	10	23	0	20.81**
計	7	23	41	0	46.47**
高校生	(n=91)		(n=103)		
男	4	19	15	13	7.07*
女	22	46	64	11	41.76**
計	26	65	79	24	45.07**

* $p<.01$ ** $p<.001$

た ($x^2=45.07$, $p<.001$)。しかし幼稚園児と異なり、高校生は Koch 法で50~85%と依然として高い実の描画率を示したが、「実のなる木」という教示があるにもかかわらず、実を描かなかったものが男子で46%, 女子で15%であった。Buck 法の高校生では実の出現が男子で17%, 女子で31%であり、幼児と比べて1割程度の伸びである。

2. 実の描画の発達差および性差について

発達段階で見ると、Buck 法では幼児と高校生の間に有意な差は見られなかったが、Koch 法では幼児に実の描画が有意に多く出現することが明らかになった ($x^2=11.46$, $p<.001$: 表2)。

さらに性差について見てみると、幼児の段階では教示法による性差は見られなかったが、高校生になると Koch 法でのみ、女子に実の描画が有意に多く出現することが見出された ($x^2=11.51$, $p<.001$: 表3)。

考 察

Koch (1952, 1949) が「実のなる木を1本描いてください。」という教示法を採用したのは、描画者に実の描画の誘導も禁止もしない方法という判断があったからである。しかし本研究の結果から、Koch 法は Buck 法よりも描画者に対する実の描画誘導性が高いことが明らかになった。さらに Koch 法は実の描画において発達的には高校生よりも幼児を、また性差については高校生女子を誘導することが判明した。

実、果樹、リンゴの木はトラウマ指標の1つであり (大辻, 2002, Cantlay, 1996, Wohl & Kaufman, 1985), その解釈は、未成熟 (Di Leo, 1983, Koch, 1952), ないしは依存欲求 (Cantlay, 1996, Jolles, 1971, Buck, 1966, Hammer, 1954) を象徴するとされている。また発達的には、14歳以上で描かれた実は幼児性に関連するという示唆や (Di Leo, 1983), 8歳以降の果樹が未熟性を示唆し、5歳から7歳までは正常であるという指摘もある (Cantlay, 1996, Koch, 1952)。さらに実の出現率が最も高いのは7歳とされている (Wohl & Kaufman, 1985)。これらの指標には

表2 投影樹木画法における発達段階別の実の出現度 (人)

	幼稚園児		高校生		x^2
	実あり	実なし	実あり	実なし	
Buck 法	(n=30) 7	23	(n=91) 26	65	0.31
Koch 法	(n=41) 41	0	(n=103) 79	24	11.46**

* $p<.01$ ** $p<.001$

表3 投影樹木画法における男女別の実の出現度 (人)

	男 性		女 性		x^2
	実あり	実なし	実あり	実なし	
Buck 法					
幼稚園児 (n=30)	4	13	3	10	0.16
高校生 (n=91)	4	19	22	46	1.89
Koch 法					
幼稚園児 (n=41)	18	0	23	0	—
高校生 (n=103)	15	13	64	11	11.51**

* $p<.01$ ** $p<.001$

年齢の幅があり、実と年齢の関係について見解が一致しない点は今後に研究の余地を残すとはいえ、実や果樹と未成熟ないしは依存性の関連性についていずれもがトラウマとの関係を認めていることは、投影樹木画法の教示法、ひいては方法論に関わる重大な問題提起であると言わざるを得ない。

したがって、このことから、Koch 法で実の描画を促すということは、教示自体がトラウマのある木の描画を誘導していることになると考えられる。トラウマ指標を誘導する教示としては、損傷感、事故、疾病、強姦などのトラウマ体験と関連があり、トラウマ経験の時期を示唆する（大辻，2002，Cantlay，1996，Buck，1948）とされている樹傷（scar or tree scar）についての研究がおこなわれている（Levine & Galanter，1953，Lyons，1955，Bolin ら，1965）。これは、樹傷の位置とトラウマ体験の時期に関連があるとする関係年齢分析法（analysis of relative age technique）の妥当性を検討するために、被検者に意図的にトラウマ指標である樹傷を木に描くように求める教示法（例：Now let's suppose that lightning hit this tree some time in the past. Take the pencil and mark an X at the point where the lightning would have struck, Lyons，1955）を用いて描画させるというものである。また筆者らは、樹傷の特殊バージョンであるが、事故や虐待等のトラウマ体験を示唆し、虐待発見に有用であるとされているトラウマ指標の1つ、節穴（knot-hole）について、Levine らと同様に変法としての教示法（「節穴が1つある木を描いて下さい。：Draw a knothole tree.」）を用いて、節穴のトラウマ指標としての有用性について検討した（田中，2002）。その結果、自発的に描かれた節穴にはトラウマ指標としての解釈が適用できるが、教示により誘導されて描かれた節穴には解釈の適用は不適切であることが明らかになった。すなわち、Koch 法で実の描画を誘導することは、樹傷や節穴のある木の描画を求めるのと同様に、トラウマのある木を描くように求めていることになる。したがって、Koch 法で樹木画を実施する際は、未熟性や依存性を示唆する実

の描画を求めているということを認識して実施する必要があると思われる。つまり、Koch 法は Buck 法の一変法＝特殊バージョンの樹木画を被検者に強制的に描くことを求める教示法として位置づけることが妥当であると言える。

今日、投影樹木画法は、パーソナリティ・アセスメント、治療効果指標、及び危機査定（虐待の早期発見他）等の心理学的査定ツールとして、心理臨床場面において多く用いられる。投影樹木画法は、それが投影法検査である限り、描画者の主体性をできる限り損ねず、また迅速に描画者の情動仮説を構築する必要がある。このことから、特定の指標を誘導する Koch 法よりも、より主体的な自由度の高い枠組みを提供する Buck 法を採用することが望ましいと考えざるを得ない。

今後の課題

今回の研究から Buck 法が教示として適切であることが明らかになったが、実をトラウマ指標の1つとして考えるときに発達段階に応じた理解が必要になってくる。発達段階に適したトラウマ指標を明らかにすることは、トラウマ指標全般の課題であるが、特に実は未熟性、幼児性、依存欲求の象徴であることを考えると、発達段階からの検討が重要であると思われる。子どもが未熟性や幼児性、依存欲求をもつことは発達上必然であり、健康なことである。考察に記したように、実の象徴解釈と年齢との関係についていくつかの先行研究が興味深い問題提起をしているが、この件についてはいまだその基準は統一されていない。今後この点についての検討もおこなっていききたい。

注) Buck (1948) の教示は正確には「Draw as good a tree as you can.」である。また Bolander (1977) は「Would you please draw a tree for me.」、Cantlay (1996) は「Draw a picture of a tree.」と教示している。表現は若干異なるが、木を1本描く（Draw a tree）という方法論的基盤は共通している。このことからいすれの教示法も発案者の Buck の系列にあるという意味で、筆者らは Buck 法を「Draw a tree.法」として位置づけている。つまり Buck の方法は Koch のようなトラウマ指標

を強制的に描かせる特殊バージョンによる投影樹木画法ではなく、基本法として認識すべきである。

文 献

- Bolander, K. (1977) Assessing Personality Through Tree Drawing. New York: Basic Books Inc.
- Bolin, B. J., Schneps, Ann., Thorne, W. E. (1956) Further examination of the Tree-Scar-Trauma hypothesis. J. clin. psychol., p395-p397.
- Buck, J. N. (1948) The H-T-P Technique A Qualitative and Quantitative Scoring Manual. No. 5, J. clin. Psycho. p1-p118.
- Buck, J. N. (1948) The H-T-P Technique A Qualitative and Quantitative Scoring Manual. No. 5, J. clin. Psycho. p1-p118.
- Buck, J. N. (1953) The House-Tree-Person Technique Revised Manual. WESTERN PSYCHOLOGICAL SERVICES.
- Cantlay, L. (1996) Detecting Child Abuse: Recognizing Children at Risk through Drawing. Santa Barbara, CA: Holly Press. (大辻隆夫抄訳, 2000. 描画分析技法, Analyzing Drawings. 児童学研究, 31, p32-44)
- Di Leo, J. H. (1983) Interpreting Children's Drawings. New York: Brunner/Mazel.
- 深田尚彦 (1958) 幼児の樹木画描画の発達的研究. 心理学研究, 28, 5, p286-p288.
- Hammer, E. F. (1958) The Clinical Application of Projective Drawings. Thomas Books.
- 林勝造 (1994) バウムテスト論考論考. 臨床描画研究 IX. 金剛出版. p3-p18.
- 一谷彊 (1998) バウムテスト診断的解釈の基本理論と実際の技法(I): 診断的解釈の理論と手順. 京都教育大学紀要 Ser. A. No. 93. p55-p77.
- 一谷彊・林勝造・津田浩一 (1966) 樹木画テストの研究—Koch の Buamtest による発達の検討—. 京都教育大学紀要, 33, p47-p68.
- Jolles, I. A. (1971) A Catalogue for the Qualitative Interpretation of the H-T-P. Los Angeles: Western Psychological Services.
- Kaufman, B and Wohl, A. (1992) Casualties of Childhood: A Developmental Perspective on Sexual Abuse Using Projective Drawings. New York: Brunner/Mazel.
- Koch, C. (1952) THE TREE TEST: The tree-Drawing Test as an Aid in Psychodiagnosis. New York: Grune & Stratton. (林勝造他訳, 1970. バウムテスト: 樹木画により人格診断法, 日本文化科学社)
- Levine, M. and Galanter, E. (1953) A Note on the Tree and Trauma Interpretation in HTP. J. clin. Psychol. p74-p75.
- Lyons, J. (1955) The scar on the H-T-P tree. J. consult. Psychol., p267-p270.
- 中田義朗 (1982) バウムテストの基礎的研究(II). 西宮市立教育研究所紀要, 184, p35-p47.
- Ogdon, D. P. (1967) Psychodiagnostics and Personality Assessment: A Handbook. WESTERN PSYCHOLOGICAL SERVICES.
- 大辻隆夫 (2002) 投影樹木画法におけるトラウマ指標の統合化とそれを巡る2, 3の問題. 児童学研究, 32, p10-p15.
- 高見良子・中田義朗 (1981) バウムテスト (樹木画による人格診断法) の基礎的研究(1)—教示を変えた場合の発達指標の量的検討(予備調査). 西宮市立教育研究所紀要, 180, p33-p41.
- 田中野枝 (2002) 投影樹木画法におけるトラウマ指標に関する一研究. 奈良女子大学大学院人間文化研究科人間行動科学専攻修士論文.
- Wohl, A and Kaufman, B. (1985) Silent Screams and Hidden Cries: An Interpretation of Artwork by Children from Violent Homes. New York: Brunner/Mazel.